

## 秘められた秀康の弟

武藤 正典

越前初代藩主秀康は、家康の二男で天正二年（一五七四）四月八日、三河国池鯉鮒（ちりふ）産見村（有富美）で生まれた。母、お万の方の素姓については三説ある。

- 1 三河池鯉鮒、知立明神の神主、永見淡路守中務吉英（よしひで）の二女
  - 2 尾張国熱田神宮、禰宜の娘
  - 3 伊勢山田外宮の神職、後に大阪に出で医者となり改名した村田意竹の娘
- いずれも神官の娘であることは共通している。

お万は、家康の正妻築山殿の侍女で、家康の手がつき懐妊したのは、天正元年、家康三十二才、お万十六才である。

「玉与記（ぎょくよき）」には、徳川譜代の臣本多作左衛門が天正二年正月下旬雨の夜、浜松城内を巡視していると木立の間から女の泣き声が聞こえ、近よつて見ると、若い女が身に一糸もまとわないうまゝ木に縛

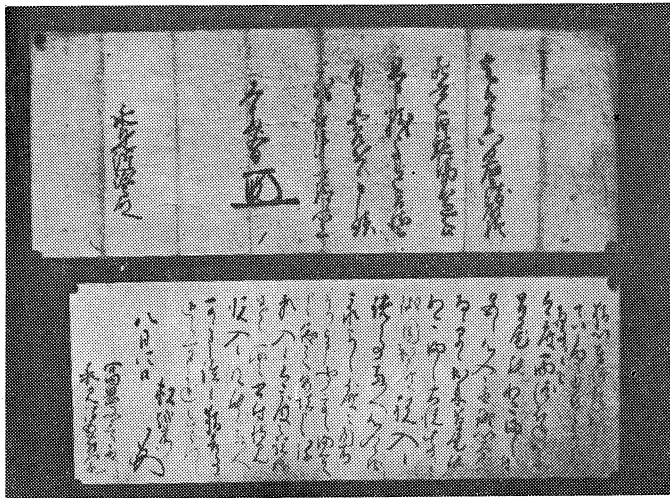
りつけられていた。この女がお万で、家康の子を妊娠したことが正妻築山殿の嫉妬を受け折檻されたもので、作左衛門はお万を助け、城外産見村、中村源右衛門宅にかくまって、生まれたのが秀康であるという。

家康が秀康を自分の子として認知したのは秀康が六才になった頃で、それまで本作左衛門家で養育され、白石の「藩翰譜（はんかんぶ）」には、「秀康は本多作左衛門能く申て、六才の御時始て父子の御名乗りありたしも、此子の御面の内に家康公の忌み嫌ひ玉ふ信康公の御母公築山殿の忌みの色ありと残るが為に、兎角はばみて此事を南光坊天海上人に密談ある。天海上人其怨執凶気の面影を転じ徳川福運を護するの相に成し参らせんと、三七日秘法を行ひ玉ひしに、不思議や秀康公の御面に小瘡多く発し、終に瘡崩れて面の相忽ち変る、是に依て家康ひそかに大に悦び玉ひて親愛し給ふ。然れ共尚御心に不レ叶所あつて秀吉公の御養子の需に応じ給ふ。」とある。

お万の性質、素行を家康は内心疑惑を持つていたようで、天正七年九月、秀康が六才の時、長男信康は、織田信長の要求で切腹させられ、当然、秀康が後継になるべき

武藤 秘められた秀康の弟

管であるが弟の同じ妾、台徳院、（西郷弾正右衛門の娘）の子に出来た秀忠に決定したのも、こうした原因で、秀康は生まれながら宿命の子で彼の生き方も決定づけられ



たのである。秀康の誕生については、雙生児で片割れの三男は病弱で早死だったという。これは当時双児を嫌って徳川家が作り上げたものらしい。

最近発見された知立明神古文書では双児の一方、秀康の弟、三男は早死でなく三十一才まで生きていたことが明確となった。

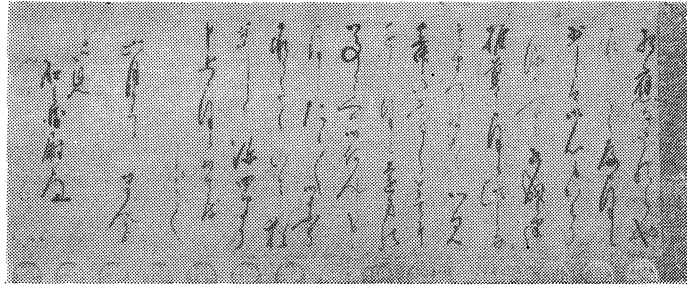
秀康の弟三男は、お万の里方、永見家で養育され、天正十九年、知立明神第三十一代の神職となった従五位永見右衛門尉貞愛で、彼は生涯家康の子として認められないまま一神官とし、慶長九年、三十一才で逝去しているが、この弟を思つて送つた秀康の書状が知立明神から発見されたので紹介することにした。

「文禄二年、秀康様肥前より結城に帰城の節、右衛門尉宅に御立宿り書院にて御酒宴を催され、御自から鉄砲を賜りし」

「慶長二年、秀康様より年々蔵米二千俵宛被下御墨印を賜り」

「慶長六年、秀康様越前に御入国の

武藤 秘められた秀康の弟



候、諸事両人心入候儀、これより度々内所より被申開、重々満足申候、依之安堵申候、弥々頼入候、今度之祝儀遺候、西之書付被見悦入候、能々兩人、可被申談候□□□可

申□□□□□□

八月四日

松越前花押

富岡又三郎殿

永見弥五衛門殿

節、弓十張、安之の長刀、吉家の脇差、王糸の小袖、巻物等種々御合力を蒙る。」

これは新築祝に送った秀康の書簡である。(写真参照)

「猶以東局出来、ていしゆ近時被参候様と存ずる事に候、今度西局出来、首尾よくわたましに付色々心入之由誠御大慶存候。早々出来首尾能わたまし大悦つ的事に候、誠に目出度祝入

「去る十五日、右衛門尉様死去之由愁傷不遇候、且申残候事之有旨、依而角兵衛差遣候、申談可然取計可給候 以上 十一月二十五日 越前守花押

永見淡路守殿

これは慶長九年、貞愛が三十一才で死亡した時、越前より送った秀康の悔状である。(写真参照)

又、実母、お方が貞愛の病氣見舞に送った書状は次のとおりである。(写真参照)

「相応なされ候也、承りたく存じまいらせ候、少しは御心もかわり御保よふにも相成候かと推量まいらせ候、このしな、そまつながら御見舞の志るしまでに進じまいらせ候、遠方の御事に候へハ御阿んじ申居まいらせ候、ただただ御よふ承りたくの三猶委しく弥四郎より申上まいらせ候めて度

六月十二日

かしこ

まんより

永見

右衛門尉殿

和歌山県、高野山の奥の院にある、御廟前の石廟に、お万の方の長勝院松室妙載大姉を真中にその右に秀康の浄光院森殿道慰運正大居士、左に貞愛の積翁等善大居士と、親子三人、仲よく並んで建立されている。なお、越前藩の重臣に永見姓が多く、秀康と共に殉死した永見右衛門尉貞武(一万八千石)をはじめ、永見志摩守吉次、永見淡路守吉克、はこの池鯉鮒知立明神、神主永見一族で、豊後へ配流となつた忠直の子も永見大蔵と名乗つて越後高田藩主となつている。永見姓と越前藩については次の回に譲る。

(県社会教育課文化財担当)